

競馬がますます
楽しくなる

続 ファンにやさしい

馬学講座

第51回

馬はどのくらい賢いのか、馬の知能について①

講師

楠瀬 良さん

公益社団法人
日本装蹄協会の
常務理事



案内人：辻谷秋人
text by Akihito Tsujiya

脳が大きくても
知能が高いとは言えない

今回のテーマは「馬の知能」ということなのだが、馬の知能とって真つ先に思い浮かぶのは「馬は人間やほかの動物と比べて、どのくらい賢いのか」だろう。「それを考えるときに昔から使われている指標のひとつに『体重に対する脳の重さ』があります」と話してくれるのは、お馴染みの馬博士、日本装蹄協会の楠瀬さんだ。

もちろん、体の大きさが違う動物を単純に脳の大きさを比較するのは意味がないので、体重あたりの脳重量に換算するのだが、それによると馬の脳は体重1キロあたりでほぼ1g(体重の約0.1パーセント)になるという。

「これは犬や猫よりは下ですが牛よりは上で、家畜の中では取り立てて大きくはないが小さくもない、といったところで

ところが、この比較法では人間より高

い数値になる動物が出てしまう。

「そこで考えられた新たな指標が『脳化指数』です。細かな計算方法は省略しますが、単純な体重比ではなく、『体の大きさに見合った脳の重さ』と『実際の脳の方の重さ』の関係を示すものです。こちらの方が単純な体重比よりも、感覚的に妥当だろうと感じられる結果が出ます」

この脳化指数でも、馬は犬・猫よりは下だがライオンや牛よりは上ということになるようだ。

「ただ、脳の大きさは知能の高さを決定するものではありません。指標のひとつではあっても、脳が大きいから知能が高いとは言えないのです」

馬には危険な場所や状況を覚える、記憶する能力が求められる

「そもそも動物によって重要な知能、求められる知能が違うのです。動物は進化の過程で彼らが生き延びるために必要な知能を獲得してきましたが、その質が動物ごとに違うのです」と楠瀬さんは言う。

例えば犬の祖先であるオオカミは群れで狩りを行うが、彼らにとっては獲物がどこにいるか、見つけた獲物がどう動くかを予測する能力が重要になる。だから当然、それに関係する知能が発達することになる。現在の犬にも、それはかなりの程度引き継がれていると考えられる。狼犬や牧羊犬の存在が、そのことを示している。

「一方で馬の場合、食べ物はそこらへんに生えている草でいいわけです。食べ物があるかを予測する知能はさほど重要ではありません。むしろ肉食動物から逃れるために、肉食動物がいそうな危険な場所や状況を覚える、記憶する能力が求められるわけです」

実際に楠瀬さんによると、馬に図形を覚えさせると半年間くらいは覚えているのだそう。

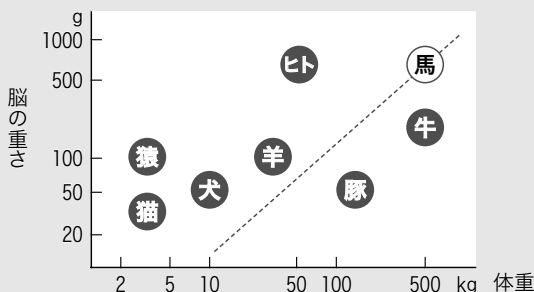
「覚えているというより、忘れられないのかもしれない。そしてこの『忘れられない』ことが、馬の知能の特徴のひとつとも考えられます」

いずれにしても、やれ予測力だ記憶力

だと、ひとつの要素だけを取り上げて動物間の知能を比較するのは、あまり意味のないことのように。

さて、一回分がまるまる前置きのようになってしまったが、次回は馬の知能について具体的に見ていくことにしよう。

動物の体重と脳の重さとの関係



※グラフ中の点線は馬の脳の体重比を示す